＜曲目解説＞

バッハには、5曲の管弦楽組曲がある。ト短調の曲は馴染が薄く、普通は第1番から第4番のものをさして管弦楽組曲と言っている。これら4曲はケーテン時代（1717年から1723年）に書かれたものである。いずれも冒頭に長大なフランス風の序曲を配していて、この為に『序曲』とも称されている。宮廷風であり優雅で典礼的なこの組曲は、内容的には協奏曲として仕上げられている。非常に高度な技巧を必要とするソロトランペットパートは、しばしばクラリネットやサクソフォンで代用されることがある程である。

シベリウスの『ペリアスとメリザンド』は、メーテルリンクの同名の戯曲に着想を得て書かれたもので、彼の他にもフォーレ等が楽曲を残している。粗筋は、「ある国アルモンドの王子ゴローは狩に出て道に迷い、森の中で泉の傍で泣いているメリザンドを見つける。どこかの国の姫君のような美しい少女をゴローは城に連れ帰り、妻にする。しかし宿命的な愛はメリザンドをゴローの異父弟のペレアスに近づけ、二人は愛し合うようになるが、その現場を見つけたゴローはペレアスを刺し殺し、既にゴローの子を宿しているメリザンドもそれを見て自ら刃を胸につき立てる。」というのである。全体は8曲の組曲になっていて以上の戯曲に副って作曲されている。

グノーは、もともとオペラ作曲家を目指していた様である。がそれも1881年の『サモラの貢物』を最後に作曲されなくなってしまった。というのも『ロメオ』以後の彼のオペラは回顧的傾向を示していて一般には受容されなくなった為である。この『小交響曲』はその後1885年に作られたものであり、広くグノー的とされるものとは異なっている。4楽章構成であっさりした楽曲であるが、あの“音を無防備”にする様なオーケストレーションの方法は、グノーらしさを色濃く残している。まさに奏者泣かせでもあり、腕の見せどころでもあるわけである。

『英雄交響曲』がドイツロマン派の最初の交響曲であるとすれば、この『第2交響曲』はウィーン古典派の最後の交響曲に位置することとなる。ベートーヴェンの交響曲の中では比較的演奏頻度の少ないものであるが、古典派最後のそれにふさわしく古典派の諸特徴をあらゆる点で満足している。が一方では、ロマン派を創出したベートーヴェンの個性も垣間見ることが出来る。

全体は4楽章構成になっている。第1楽章は主音のユニゾンで始まる壮大なアダージョとこれに続く軽快で健康的なアレグロによっていて、初期ロマン派の傾向を示してもいる。が展開部は極あっさりしていて、この傾向とは反している。第2楽章はモーツァルトの緩徐楽章を聴いている錯覚に陥いる。自由でファンタスティックな展開部を有していて、穏やかな春の海の趣きがある。第3楽章は、いかにもベートーヴェンのスケルツォに仕上がっている。旋律の面で、また音色や抑揚の点での対比が効果的に取り扱われている。第4楽章は、闊達なフィナーレとなっている。第2楽章がモーツァルト的なのに比べてこの楽章は、主題間の経過句の音処理の仕方にハイドン的性格を見ることが出来る。“モーツァルトの精神をハイドンより受け継いだベートーヴェン”と評される様にウィーン古典派の大団円の終曲には彼ら3人の精神が映し出されているのかも知れない。

ベートーヴェンの個性とは一体何だろう。一言で言えば、楽曲に内在する推進力ではないだろうか。何処までも突き進もうとするエネルギッシュさがベートーヴェンなのである。1802年に作曲されたこの交響曲に前後して、あの悲痛な「ハイリゲンシュタットの遺書」を残すベートーヴェンではあるが、人生に於ける推進力も持ち合わせていた。後に他人に容れられず、そうあってなお博愛精神に満ちていたベートーヴェンは、まさに“人間の創った神”なのではないだろうか。

（藤井部　勉）